

## 聖光 第四巻第三号

## 自由

人間の生活に於ける衷心の願いは何であるか。この問いに対する答は種々なる言葉で言いあらわすことが出来ると思います。その答が何であるにせよ、我々はただ食つて着ていることに満足しないで、何ものかを求め、何ものかを追求し、何ものかを探し求めています。そうして時代から時代に、幾万年幾十万年、人類の歩みはついに今日の文化を生み出して来しました。

何を求めて来たのか？ それに対する答の一つとして、それは「自由」であると申すことが出来ると思います。

我らが人間の歴史を播いて見ます時、歴史は一体何を物語るか、一番に気づくことは、自由を獲得するために歩んで来た、血のにじむような努力のあとであります。

「我に自由を与えよ……然らざれば死を与えよ。」とは奴隷の如く自由を奪われた、不幸にも虐げに泣く人の真の叫びであります。自由を与えられないならば、生も死も同然であります。自由さえ与えられて意義さえあれば、死すら厭わぬのが人間の深い心持ちであります。自由のない人生は死よりも辛い。そこには永遠の幸福も、道徳も、光明もあり得ないからであります。ですから過去の聖者・賢人・偉人たちは、時に生命をなげ出して、人類の自由のために戦いつづけて、自由のための先駆者となりました。

源頼朝が武家政治をはじめてから七百年、日本は聖天子の光がおおわれて、徳川幕府三百年の最後まで、封建の政が行われ、土農工商の階級が作られ、武士は横暴なる支配者たるを許され、農工商は、ただ労働と無智とに甘んじて、一生大地より頭を上げる事が出来ず、切り捨てごめんなどと、一般国民は武士の刀の前には大根のように軽んぜられて来ました。我らが幕末ものを読んで一番心を感じせしめられるのは、こうした自由の奪われた日本国民の上に、聖徳を中心とする真自由の生活を展開するために、幾多の志士が身命をなげ出してかかっていることです。

米国の歴史の上にワシントンと、リンカーンは不朽であります。ワシントンは米国を英本国の虐政より救つて独立せしめ、自由の国、アメリカ合衆国を建設した米国の父であります。リンカーンは、血涙をしばつて、鉄鎖の下に泣く二百万の黒人奴隷を青天のもとに自由の人として解放しました。皮膚の色が黒いといって、鎖をつけられて、牛馬の如く売買されていいものか。母は愛兄をその懐から奪われ、妻は愛する夫から引き離されて幾百里の末に運ばれる。そんな残虐が人間同士の間で許されているのでしょうか。自由を求めて泣く二百万人の血涙は、米国の幾多の人格の上に反映し、ついにリンカーンの名において奴隷解放は実行されました。

これはただ単に米国の昔物語りでありましょうか。形に表われた鉄鎖はありますまい。金銭で売買されてゆく奴隷こそありますまい。しかし地上のすみずみに果してそうした奴隷の如く泣いている人がないではありませんでしょうか。人類自由獲得のための努力と愛は全く無用でありましょうか。

## 死の平和

我らが生きるとは、単に衣食住のみに囚われていることでなくて、自由を得るために絶えず働きかけてゆくこと自身であると申しました。その自由とは一体何を意味するかと考えてゆきます時、誰でもの心に浮かぶことは、

一、私を外部より束縛する力への戦いであります。

犬には鎖がついており、小鳥には籠があるように、我らが周囲から有形無形の鎖で縛られている時、そこは牢獄のような世界になってしまつて、幸福を感じずることは出来ません。

一家の主人が時に横暴なる権力をふるうことがあります。厳しい掟があつて、それを絶対に守らねばなりません。家族の者たちは唯ブルブル震えつついかなる主人の横暴にも、一言半句の言葉を返すことは出来ない。その上、気に入らないことがあればすぐ手が出ます。足で蹴られます。

そこには美しい平和と、整然たる秩序があるかも知れません。しかしそれは「死の平和」であります。死の平和は如何に美しくても、自由なる争闘におとつています。昔はこの死の平和を保つために為政者が、国民の口を封じたり、学者志士を殺したり、先駆者を牢獄につないだり致しました。この暴君のような親や、戸主が今頃はいいのでしょうか。不幸にして私は、この死の平和の中に泣く亡霊のような人々の訴えをあまりに多く聞きすぎます。

2

他律的な、高圧的な律法に子供をはめつけて喜ぶような暴君となつてはならない。教師の中に、父親の中に、母親の中に、如何にこの暴君の多いことであろう。

一夕の講演会や説教にすら、絶対にその妻や下女を出さない家庭がある。全く自由を奪われた者の陰に流す涙がその主人には見えないのでしょうか。

大地に手をついてお願い致します。

奥様に下女に、看護婦に、もつと出来るだけの自由を与えて下さい。

世の中のお姑様、もつとあなたの嫁に自由を与えて上げて下さい。

私たちは自由を与えられたからといって怠けたり、勝手に流れたり致しません。私どもが自由を求めるのはもつと生々として働きたいためであります。

自由を与えて下さいとは決して教えや忠言を拒もうとするものではありません。私どもは喜んで足らない所をお教え下さるのを受けます。

講演があれば出来る限り、聞かせにお出し下さい。活動にも劇にも花見にもお出し下さいませ。如何に美しい邸宅に住んでも、衣食は立派でも、もし自由を一切束縛されているならば、そこは美しい牢獄であり、一切は私どもを縛る金の鎖であります。何が美しかろうと、鎖と牢獄の中には、美しい青い天と輝かしい日光はありません。

解放

「先生聞いて下さい。私は普通文官試験をやつたのことで通りました。ある方のご紹介であるお役所で仕事することになったのですが、両親がこの田舎から出ることを許してくれません。両親は年老いていますので、私を側におきたいのです。家は兄がいて世話しているのですが、両親はそれだけでは寂しいから、お前にも少々は身代をわけてやるから、妻を娶つて家持ちをして出ないでくれというのです。それではとも将来の目的は立たないのですが………」

御両親に申します。年老いて子供が遠方に行くことは淋しいことに違いありません。身近くに子供たちを住まわして心にぎやかに死んでゆきたい。その心持はわかりすぎる程わかっています。

しかし精進する気持のない愛は結局、相手を殺してしまいます。あなたの愛はそれは盲目であります。勝手であります。

真愛は、決して相手を所有したり、縛つたりして、自分の寂しさを満足しようというような所にはありません。愛とは奪うことではなくて与えることであり、縛ることではなくて解放はなつてやることです。

私ども……殊に若い者は、伸びられるだけ伸びきりたい強烈な願いを持っていきます。その芽をのばし、枝をのばそうとされているのをつまれたり、折られたり、まげられたりすることは、死ぬほど辛いことであります。あなたがもしその子を愛するならば、出来る限りに於いて個性を尊重し、真面目な願いをそのまま生かして下さい。もしそれが不合理な願いであったり、真面目を欠いだ願いで、単なる虚栄や、目的もない名譽熱であったり、世の中をかきみだすような願いであった場合には、叱責も、忠言も必要であることはもちろんです。けれども、頭から叱りつけてその志を折つてしまふのは、その子供の将来を葬つてしまうのです。たとえそれが可愛いという心から発したことであろうとも、それは決して真愛ではなくて、あなたの玩具いぢりであり、所有欲の満足であり、自分勝手の毒薬であります。

しよせん真愛は寂しいものであります。

子供がまつすぐにのびてゆくのを見て、静かに微笑みつゝ、念願する親の目には、寂しさに堪える涙があるべきはずであります。

自由とは自己を限りなくのばすことであり、創造することである。私どもは、苦を厭うよりも、自分をのばすことが出来ない時悩みます。人格の育てられて行かない所にどうして生きている喜びがありません。

しかし時に我らは自分の幸福と他人の幸福とが両立しないことを感ずる場合があります。甲が自由になれば、乙が不自由になり、甲が得をすれば、乙が損になる。こう考えられる場合があります。

しかし私どもは一つの植木鉢に、数本の木を一緒に植えて見ましょう。果して彼らは争うでしょうか。彼らは皆成長します。そうしてその間に一つの自然の調和を作ります。共存共栄といえますか、決して彼らは他を殺して自分だけが成長しようとは

いたしません。釈尊は彼の正覚成道の中に自利利他一如の世界を見られたのであります。真実の意味での自利はきつと他のためになつてゐる。自利と利他との両立しないような自利は、真の意味において自利でなく、真に自らのためにならないような利他は、真の利他ではあり得ないのであります。もし自利と利他とが一つであるのであれば、真の道ではないのであります。

主人一人の自由のために、家族全体を縛つたり、虐げたりするようでは、その主人の自由は決して真の自由でなくて放縦であり、勝手であります。

自分が自由の人であり、自由の生活者である時、他の自由をも尊重します。親が自由なる人格者である時、子供たちも自由なのび方をします。自由にしたら、我慢な勝手な子供が出来たり、嫌な家庭ができたりすると思うのは大きなまちがいであります。

人の自由を拘束することばかり考えている人の顔色は大抵曇つています。そうしてこうした型の人の前では争いごとの絶える時がありません。こうした人は大概その周囲の人たちを救われざる悪人と見、自分を高く祭りあげている、内省も懺悔もない私の強い人であります。こゝにおいて自由の問題はもつと根本の問題にふれなくてはなりません。

#### 内への目覚め

すでもうしたがごとく我らは常に外からの拘束を受けています。如何にこの拘束をきらつても、絶対にこの束縛なしに生きて行くということもまた出来ないことであります。もし不自由ということがなければ、自由ということすらありません。こゝにおいてもし我々が、外にばかり自由を求めて行くならば、ついに地上には住む所はなくなりません。気に入らないものを取り去ることだけがもし自由を得る唯一の方法であるならば、ついに死より外に道はなくなります。夏は暑い、冬は寒い、貧もつらい、金持もつらい。商人も嫌い、月給取りもいや……かように考えて行けば、甘い所か気に入るところか、気まぐれに動きに動いて行くより外にはなくなります。こうした一旅行を背負つて動く人には、浮草のような気まぐれ以外には何もありません。ここにおいて我々は更にもつと積極的な自由を求めて行かなければなりません。

梅の花にだつて雪が降り、霜がおります。人の上にだつて、齒をくいしばつて忍ばねばならぬほど苦しいことがあります。

「貴方に周囲が自由を与えぬことも苦痛でしょう。私もその束縛が取り除けられて貴方の上に自由が与えられることを切念せずにはいられます。しかしながらそれを切念しつつも、今一段の目覚めを貴方に求めずにはいられます。決して悲観せず自暴自棄せず、じつとそのただ中に思惟致しましょう。その思惟の中から新しい自由の天地が生れてこねばなりません。」

火は誰にでも熱い。氷は誰にでも冷たい。火を涼しいと思えといふのでなく、氷を温いと思えといふのではない。

しかし砲煙弾雨、命を的の戦場の中にも心に味はう自由があり、貧の中にいて貧を  
超える道があり、不足の中にいて、満足を感ずる世界がある。

犬は餓えた時、見せられた魚は必ず食う。しかし人は時に渴しても飲まぬことがあ  
る。婦女子の中にも我が貞操を守るためには死を以ってした者もいる。

ソクラテスは牢獄や、毒杯の中にも自由を味はい、親鸞聖人は配所の雪にも御恩を  
感じた。たとえ身は不法なる牢獄の中に縛られても、そこに感ずる自由がなければな  
らぬ。